論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

(甲)・乙	氏　名	岸　隆
学　位　論　文　名	A Risk Analysis for Ischemic Necrosis of the Remnant Stomach After Distal Pancreatectomy in Patients With Previous Distal Gastrectomy: A Multicenter Retrospective Survey by the Japanese Society of Pancreatic Surgery	
学位論文審査委員	主　査	大嶋　直樹　印
	副　査	渡部　広明　印
	副　査	柴垣　広太郎　印

論文審査の結果の要旨

幽門側胃切除（distal gastrectomy：DG）後の残胃は、後胃動脈、短胃動脈、左下横隔動脈（left inferior phrenic artery：LIPA）、食道動脈などにより血流が維持されている。一方、膵体尾部切除（distal pancreatectomy：DP）は脾臓摘出を伴うことが多く、DG後に施行した場合、脾動脈系血流の遮断により残胃虚血壊死（ischemic necrosis of the remnant stomach：INS）を来す危険性が指摘されてきた。そのため、INSを危惧して予防的残胃全摘が選択される症例も存在していたが、DG後DPにおけるINSの発生率やリスク因子を大規模症例で検討した報告はなかった。

本研究では、日本膵切研究会の支援のもと、全国175施設を対象とした多施設後方視的アンケート調査を実施し、2009年から2019年にDG後DPを施行した414例のうち、残胃温存が試みられた364例を解析対象とした。INSは4.7%（17例）に認められ、うち15例は術中に、2例は術後に診断された。多変量解析の結果、術前因子として「胃癌に対するDGの既往」および「膵癌に対するDP」が独立したリスク因子であり、術中因子としては「LIPA切離」が唯一の独立した高リスク因子として同定された。

本研究は、DG後DPにおけるINSを全国規模で解析した初の報告であり、LIPA温存の重要性を明確に示した点で学術的価値が高い。後方視的研究である点やINS症例数が限られる点は本研究の制約であるが、DG後DPにおいては、術前画像によるLIPA走行の把握と、術中の慎重な温存操作が、残胃温存を可能とする重要な戦略であることを示唆しており、今後の外科治療方針決定に有用な知見を提供するものと評価された。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、全国多施設において幽門側胃切除(DG)後の膵体尾部切除(DP)364例の解析を行い、残胃虚血壊死(INS)を4.7%(17例)に認め、胃癌に対するDG既往、膵癌に対するDP、左下横隔膜動脈(LIPA)切離が独立したリスク因子であることを明らかにした。本研究はDG後のDPに対するLIPA温存の重要性を示した初の全国規模研究であり、得られた知見の意義は大きいと思われる。また、審査において発表は明瞭かつ説得力があり、質疑応答も的確であった。加えて関連分野に関する十分な学識を有していることから、医学博士の学位授与に相応しいと判断した。

（主査 大嶋　直樹）

申請者は、幽門側胃切除術後に膵体尾部切除術を必要とする患者において発生しうる残胃の虚血及び壊死の発生という病態について多施設研究を実施してその危険因子について解析を行った。左下横隔動脈の切離が残胃虚血の独立した危険因子であることを初めて特定し、これを防止する手術計画の立案及び術中判断の観点から、高い臨床的意義を有する研究といえる。審査における質疑応答も的確に行い、関連する領域の知識も十分なものがあると確認されたことから、学位の授与に相当するものと考えた。

（副査 渡部　広明）

幽門側胃切除後に膵体尾部切除という頻度の低い臨床状況において、発生頻度は低いが重篤な合併症である残胃虚血壊死の発生率と危険因子を、全国規模多施設後方視的アンケート調査により体系的に検証した点を高く評価する。とりわけ左下横隔動脈切離を唯一の独立高リスク因子として同定し、その温存が予防に重要であることを明確化した知見は、術前計画および術中手技に直結する臨床的意義が大きい。質疑においても研究方法の妥当性と研究結果の解釈を的確に説明できており、学位授与に相応しい。

（副査 柴垣　広太郎）

（備考）要旨は、それぞれ４００字程度とする。